武家名目抄稿

居處部

廿六

和書門
類 二五二〇六 號
函 七七 架
冊 四四九 冊
四五六

内閣文庫
和書
類 二五二〇六 號
冊 四五六 冊
函 一五三 架
一一

内閣文庫
番號 和 25206
冊數 457(165)
函號 153 275

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
COLORchecker
X-rite
MSCCPPCC0411
MSCCPPEC0411

国立公文書館
National Archives of Japan

宮内庁書陵部図書寮文庫

武家名目抄稿第廿六冊

居處部廿五目録

殿主
九重殿主
七重殿主
五重殿主
三重殿主
矢倉

宮内庁書陵部図書寮文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

櫓搔楯
高櫓
二階矢倉
三階矢倉
渡櫓
門矢倉
隅矢倉
向櫓

走矢倉
出矢倉
着到矢倉
卜力八ノ矢藏
端矢倉
小矢倉
見セ櫓
畀矢倉

国立公文書館
National Archives of Japan

土矢倉

井樓

矢倉井樓

釣井樓 今无

太鼓矢倉 今无

鐘撞堂

武家名目抄稿第廿六冊

居處部廿五

殿主

織田家譜云久秀者元京西岡人也貪賤而經歷諸州得仕三好而威權日振弑義輝公張臂於洛中幾内始造殿守又作長屋及于三好衰而遂属信長

豊臣家譜云秀吉與大權現共登天守 或作殿主

奇貨雑珍委積之且使利休点茶既而告暇
云々
十八
大友興廢記云宗麟上洛条種々の雑談の事
かはせあさまれに非面顔を羅述事毎
ののちに見物いとまなきよりかはせ
あさまに日の暮るを
若殿の御舎弟兵濃守殿を伴ひ時分
はちかしかしてかの見物あるべき宗麟おは
見物のすはやあさまれに天守重々是又
云説は安東事なるも也下すり三重目は板
樓十四五畳あるひは小袖あるひは白あやあ
るひはくれなゐ井なりきつ事を一階
下は皆は藤なりていそのかいろのの道具
ともをかれに五重六重目は長刀を金銀の
飾数を尽しは数へ難き器を見乃後天
下は廣百ばかり作は第卧いんとて

はちやくこせられる

安土日記云天正七年五月十一日吉日ニ
付テ御殿主ヘ御移徙

又云天正四年四月朔日ヨリ當山以大石
御構之四方石垣ヲ被築又其内ニ御天守
ヲ被仰付候云々

豊臣云天正九年ヨリ去播州姫路ヲ云所ヲ
秀吉住ヘキ城ヲ築ケル所ニ寺社多淳

久ヲ住シ代國ヲ中ヲ変ケンヨリ
き石あるを其小ヲ民退き秀吉に来れ
彼ヲ石ヲ立て山城ヲ地代ヲ高ケ水
ヲ入やくるあまを造ツ事天王
とやそ家を祖父てるくるやう
門ヲはこのまへきしくるかいりを新
をあるへ

増補家忠日記云天正十年五月廿日信長

高雲寺ノ館ニメ大神君ヲ饗ス信長自ラ
配膳シ梅雪及大神君ノ家臣數輩ニ至ル
迄信長自手ラ肴菓ヲ賜ル信長大神君ノ
御手ヲ挽テ殿守ニ登リ是ヲ歴覧メ本座
ニ皈玉ヒ夜ニ入テ退出シ玉フ云々六月
十四日光秀遂ニ安土之城ニ入テ金銀財
宝ヲ殿主ヨリ出メ從卒等ニ割与ヘ制法
ヲ定テ明知左馬助ヲシテ安土ノ城ヲ守
ラシム

駿府記云慶長十六年辛亥十月三日所々
御代官為納米之價金一万九千両松平右
衛門佐納之殿守御庫
當代記云慶長十九年八月廿九日尾州名
護屋本丸殿守ノ北東石垣八十間餘崩是
福島左衛門手前也
懐中記云寛文五年己巳正月二日大坂城

天守雷火（城中高楼名天守諸天守護之義也去天正四年織田信長築江州安土城之日肇建天守以示武威又殿守）

九重殿主

幹須賀家文書秀吉小早川左衛門佐に宛書状云城中矢蔵高き巣天守を九重揚之共

柴田武百汁に相竜城中匠に故入辺に

ほ友道具多頂死人の集に成存詰軍

勢に中より完竟に兵士を撰出天守

に角石垣汁に裁入せ（本ノマヽ）に成理色も軍束

武篇を仕候武者故七度に切出候（とも和

戦の事依不叶天守九重の上に揚詰軍に

詞を君御理色の服に切猿（横）を足垂れの後学

に世よとゆしい

柴田退治記云終攻詰甲九に中以大石積

上磊其牆數仭也比晉平公所造九層臺天

守上九重石柱鐵扉重に搆精兵三百餘人

楯籠禦之城内無閑地五歩一楼十歩一閣
廊下針連天守高聳以多勢欲攀之以弓鐵
炮打之以長道具貫之懸共具足被疵者多
故秀吉下知而雑兵除之選出六具差固勇
士數百人手鑓打物計攻入天守之内勝家
年來之武勇今於是乎相盡處也於異國者
吳越分兵於本朝者義經高館合戰不屑内
甲兵已切息之間引梯取上天守九重目

詞戰云勝家只今切腹之條敵中有心侍鎮
前後見物可相傳名於九夷八蠻由高聲名
乗云々

七重殿主

氏郷記云會津ノ栄ヘ昌フル事日ニ増シ
時ニ益セリ養々シク城ノ普請ヲセラレ
七重ノ殿守月見矢倉ニ大鼓門其外ノ殿
々金銀ヲ縷メタリ

織田家譜云天正四年七月安土殿主成石垣
二重高十二間南北廿間東西
十七間石垣以上至殿主七重
安土日記云安土御天主之次第石藏ノ高
サ十二間余一重石クラノ内ヲ土藏ニ用
是ヨリ七重也二重石藏ノ上廣サ北南
卅間東西卅十七間高サ十六間中アリ
柱數二百四本立本柱長サ八間フトサ一
尺五寸六寸四方一尺三寸四方木御座數

ノ内悉黒漆也西十二疊數墨繪ニ梅之御
繪ヲ狩野永徳ニ被仰付何モ下ヨリ上マ
テ御座敷之内御繪所悉金ナリ同間之内
御書院アリ是ニハ遠寺晩鐘之景氣力ゝ
セラレ其前ニ盆山ヲ置セラレ次四疊數
御棚ニ鳩ノ御繪ヲ書セラレ亦十二疊レ
キ鵜ヲ書セラレ鵜ノ間ト申也亦其次八
疊レキノ奥四テウレキニ雉ノ子ヲ愛ス

ル處有南亦十二疊シキ唐ノ儒者達ヲカ
々セラレ亦八テウ敷有東十二帖シキ次
三テウシキ其次八テウシキ御膳ヲ拵申
處也クモス八テウシキ是亦御膳拵申處
也六テウシキ御南戸亦六テウシキ何レ
モ御繪所金也北ノ方御土藏アリ其次御
座敷廿六テウシキ御南戸也西六テウシ
キ次十テウシキ亦其次十テウシキ同十

二テウシキ御納戸アリ敷七ツアリ此下ニ
金灯炉ヲカセラレ候三重目十二疊敷花
鳥ノ御繪アリ則花鳥ノ間ト申也別ニ一
段四テウシキ御座間アリ同花鳥ノ御繪
有次南八テウ敷賢人之間ニヒヨウタン
ヨリ駒ノ出タル所有東麝香ノ間八疊敷
十二テウ敷御門上次八テウ敷呂調賓ト
申仙人并傳説ノ圖アリ北廿テウ敷駒牧

之御繪有次十二テウ敷西王母ノ御繪
アリ西御繪ハ十二レ御縁三段廣縁也廿四
テウ敷ノ御物置ノ御南ノ方有口ニハテウ
敷ノ御座敷在レ之柱數百四十六本立也四
重メ西十二間ニ岩ニ色々ノ木ヲ被レ遊則
岩ノ間ト申ナリ次西八疊敷ニ龍虎ノ戰
アリ南十二間竹色々カヽセラレ竹ノ間
ト申也次十二間ニ松計ヲ色々被レ遊則松
ノ間ト申也東八テウシキ桐ニ鳳凰書セ
ラルヽ次八テウシキ許由耳ヲ洗ヘハ巢
父牛ヲ牽テ歸ル所兩人ノ出タル故郷ノ
躰有次御小座敷七疊シキテイ計ニテ御
繪ハナシ北十二疊シキ是ニ御繪ハナシ
次十二テウシキ此内西ニ間ノ所ニ手マ
リノ木被レ遊次八テウ敷庭子ノ景氣則御
鷹ノ間ト申也柱數九十三本立五重メ御

繪ハナシ南北ノ破風ロニ四畳中ノ御座
敷両方ニアリ小屋之段ト申也六重目ハ
角四間程アリ外柱トモ朱也内柱ハ皆金
也釋門十代御弟子等釋尊成道御説法ノ
次第御縁輪ニハ餓鬼トモカヽセラレ御
縁輪ハタ板ニハシヤチホコヒレウヲカ
カセラレ高欄擬法珠ホリ物アリ上七重
目三間四方御座シキノ内皆金也外輪是

中ノ子御カ

又金也四方ノ内柱ニハ上龍下龍天井ニ
ハ天人御影向ノ處御座敷ノ内ニハ三皇
五帝孔門十哲商山四皓七賢等ヲ書セラ
レヒウチホウチヤ数十一ツヽセラレ
狹間戸鉄也数六十余アリ皆黒漆也御座
シキ内外柱摠ニ漆ニテ布ヲ着セサセテ
レ其上皆黒漆也御座敷内外柱惣テ漆ニ
テ布ヲ着セサセラレ上一重ハ金具ハ後

藤平四郎仕候也京田舍衆手ヲ盡シ申也
二重目ヨリ京ノ名井阿弥カナ也御大
工棟梁岡部又右衛門漆師首刑部白金屋
御ト工宮西遊左衛門尾康人之一觀ニ被
仰付奈良衆ニ燒セラルヽ御普請奉行木
村次郎左衛門

五重殿主

當代記云慶長十七年九月二日夜前丑尅
ヨリ大風今日至ニ未尅西返殊強則止中略伊
賀國上野城古ノ殿守ヲ毀テ新殿守ヲ立
ケル日五重ノ上ノ重計菅惣ハ未菅塀不ニ
出来ニ右ノ西風ニ倒大工并手傳ノ者百
八十人倒死云々

三重殿主

會津陣物語云京大坂ノ怒劇ハ内府ノ伏
見ニ被ヽ居其間隔ル故也只今ヨリ大坂西

ノ丸ニ住居シテ秀頼ヲ守立給ベシト有
シカハ同十一日家康公西ノ丸ヘ入リ給
ヒ増田長束相談シ大廣間并三重ノ殿守ヲ
上テ内府ヘ進上シケル
矢倉
倭名類聚抄云櫓唐韻云魯反今案舟具之
櫓（和名古之）艫見舟具之讀城上守禦（夜久良）
續日本紀云寶龜八年九月丙寅内大臣從
二位勲四等藤原朝臣良継薨（中略）太師押勝
起宅於楊梅宮南東西構樓高臨内裏南面
之門便以為櫓人士側目稍有不臣之譏于
時押勝之男三人並任参議良継位在子姪
之下益懐怨恐云々
奥州後三年記ニ家衡ノ乳母千任トイフ
モノアリ。ノ上ヨリ立テ弩ヲ引テ射軍
ヲ云々

今昔物語平維茂罰藤原諸任語云十月ノ
朔比ノ程ニ丑時計ニ前ニ大キナル池ノ
有ルニ居タル水鳥ノ俄ニ譟シク立ツ音
ノシケレハ餘五驚テ郎等共ヲ呼テ軍ノ
來タルニコソ有ヌレ鳥ノ痛ク騒クハ男
共起テ調度負ヘ馬共ニ鞍置ケ檜ニ人登
レナト俗テ郎等一人ヲ馬乘セテ馳向テ
見テ來トテ遣ツ

長門本平家物語云加賀國軍條富樫太郎宗親林
六郎是四一城ニこもる件城のかまへ所ハ
ふか田のわそなハてせうしろハ大竹たけく
あて巖石あり上のたんよ矢庫を異のふ
ちは板をかきくしてもよハそこ所もれくる石
ゆみをもつて何方勢の射れそひさてる
を一きも乃加數あ庵かゝさるかまへりゝ云

源平盛衰記云ハ牧夜討條時政南面ニ引退テ
ヒカヘタリ景廉ヲ見テイカニ御邊ハ當
時御勘當ニテヲハスルニト問ヘハ俄ニ
被召テハ牧カ首貫テ進ヨトテ御長刀ヲ
給ハレリ是ヲ見給ヘトテ指出シ抑北條
殿宵ヨリ寄給ヒタレハ城ノ安内知リタ
ルラム有ノマヽニ語リ給ヘ私ノ軍ニ非
ス君ノ御大事ナリト云フ時政城ノ内ノ
搦ヘ様ヲハ知ス門ヨリ外ニ矢藏アリ兵
共矢藏ヨリ下矢ニ射ル矢藏ノ前ハ大堀
ナリ橋ヲ引タレハ入ル事叶ス互ニ堀ヲ
ヘタテヽ遠矢ニ射レハ宵ヨリ今マテ勝
負ナシ
又云一谷城搦條平家ハ讃岐國屋嶋ヲハ漕出
テヽ攝津國ト播磨トノ堺ヒ難波潟一ノ
谷ニソ籠リケル中略陸ニハ此彼ニ堀ヽ逆

木ヲ引キ二重三重ニ矢藏ヲ搖キ垣楯ヲ
搆ヘタリ

太平記云稲村崎成ル干潟條沙頭路狹キニ浪打涯
マテ逆木ヲ繁ク引懸テ澳四五町カ程ニ
大船共ヲ並ヘテ矢倉ヲカキ横矢ニ射サ
セント搆タリ

新古物語云山名伊理大夫義の西四ノ村の
助影安（キヤスマ）と云ふ弓兵五人ばかりの弓ノ矢ばつ
りしてすゝと如安積屋乃あまりふ人をもかけ
ふ此ゝ去里殆ふ不ふそやはくふて伯きとも
矢一ぢまいらせんとて十三そく三ふせよ
つひき兵ともちかりを安積ふ者ちなるか
きかゝの石法きいと上三すたりをいと伏
去てあまる矢ふ矢倉のふせきいとふ嚴中
去紀てそいゝて彦
重郎
重かたちを紙云武義坊屋ん けいき屋く

ら此あ由を以いろをたゝ出まとゝ
由を為ゝ

信長記云（信長ニ移玉フ條）清洲城弘治元年正月ハ
比ヨリ清洲ノ守護代坂井大膳内々思ケ
ルヤウハ坂井甚助川尻左馬允織田三位
ナト討死ノ上ハ我一人シテ織田彦五郎
殿ハ守立奉ラン事モ叶ヒカタカルヘシ
織田孫三郎殿ト和睦シ北ノ櫓ニハ我身
ス、ハリ南ノ櫓ニハ孫三郎殿ヲ居申両人
ノ彦五郎殿ヲ守立申ヘシト評定シ
坂坂ト林慶長記云慶長四年正月十九日ヶ夕
家康公御屋敷ヘ沼新少輔大夫ヶ五ケ中
シ由沙汰ヲ仕ての事なるハ御屋敷の走シ
ヨ材木石持ちとおく縄ケの屋くを
あけ今やゝと石ケい
築城記云山城ノ事矢蔵ハ塀ハムラ子ヶ

二尺ニ成ルアクル也弓一張ダツカと可強矢ノ
ヲ数多い事ハ強い大小上へ〻〻す
又云平城矢クラハ城ノ上二尺余サマ面ノ方
二ツ成サマノ戸ハ前へ引ヒラキ小ト云ノ如
ク外へをし出をある也おのよるべし矢ハ
城より二尺ハ内へ入くあくる事是ハ
こいこそ対つけい矢をうき篇へいの内へ
云へきゐ也又角いまるいつくで強にやり
ラ横を横ハ横ハ袋也スノコ也ようで竹也ようで
高ちすへりてわろき也
櫓搔楯
太平記云大渡山崎等合戦條糸河遠江美濃尾張ノ
ハヤリ雄ノ兵共千餘人馬ヲ乗放〻〻我
前ニトセキ合テ渡ル手射落サレセキ落
サレテ水ニ溺ル者數ヲ知ス其ヲモ不
顧幾程モナキ橋ノ上ニ沓ノ子ヲ打タル

力如ク立雙テ重々ニ構タル櫓カイ楯ヲ
引破ラント引ケル程ニ敵ヤ兼テ構ヲ
タリケン橋桁四五間中ヨリ折レテ落入
ル[illegible]
梅松論云京方宇治ノ討手ノ大将義貞楯
乃中ニ間引ク櫓掻楯ヲ上テ相支ケリ

高櫓

平家物語云せのおうさ井の四郎ら絵ひら
をよせて足ぶれ八せのかの左衛門か絵やを
ハしやうはかもてはなたりやくらにはゆりあ
ゲて[illegible]たりける

源平盛衰記云（廿三）義経範頼京入條御曹司河ノ邊ヲ
カヽク高矢倉ヲ造セテ此上ニ登テ四方ヲ
下知シ給ヒケリ矢立ノ硯ヲ取リ寄セテ
宇治川ノ先陣ト甲ノ者トモヲ次第明々
ニ注テ鎌倉殿ノ見参ニ入ヘシト被仰ケ

レハ軍兵各勇ミヲ成テ忠ヲ抽ムト雖色
メキケル中ニ昔ハ武士ハ
又云熊谷父子寄城戸口條熊谷城ノ中ヲ覗マヘテ
申ケルハ中略穴無慙ヤ人共ヤ雀ワマテ命
ヲ惜ムラン出ヨ組マムト云ヘ
トモ高櫓ノ上ヨリ城戸ヲヘタテミ雨ノ
フルカ如クニ射ケル云々
太平記云義貞軍條是國主兩統御爭トハ申乃

カラ只義貞ト尊氏卿トノ所ニアリ纔ニ
一身ノ大功ヲ立ン為ニ多クノ人ヲ苦シ
メンヨリ獨身ニメ戰ヲ決セント思故ニ
義貞自此軍門ニ罷向テ候也ソレカアラ
ヌカ矢一受テ知給ヘトテ二人張ニ十三
束ニ臥飽マテ堅メテ引ホリ絃音高ク
切テ放ツ其矢二重ニ撥タル高櫓ノ上ヲ
越テ將軍ノ座シ給ル帷幕ノ中ヲ本堂ノ

艮ノ柱ニ一ユリ ユリテクツマキ過テソ
立タリケル
賀越闘諍記云（江沼郡三城落去條）松尾龍崎真先ニ
懸テ戦ヒ木戸ワキニテ敵ト引組テ指違
テリ死ニケル城中ニハ是ヲ見テ高矢倉
ヨリ指下シテ散々ニ射ケレトモ云々
二階矢倉
三階矢倉

太閤記云（名護屋旅館作事条）ニ〻丸艮角二階矢蔵（四間五間）
溝口伯耆守同三階矢蔵（九間十間）伊藤長門守
又云（因幡国鳥居城条）斯く湊川ハ舟橋を掛丸杭
を打四方ヨ城を城廉垣を結回一十町
ハ三階〻矢〻を立
渡櫓
太平記云（山門攻條）爰ニテ敵ノ陣ヲ見渡セハ
無動寺ノ麓ヨリ湖ノ波打際マテカラ堀

ヲ二大餘ニ堀通ノ處々ニ橋ヲ懸岸ノ上
ニ屏ヲ塗関逆木ヲ密シクメ渡櫓高櫓三
百餘箇所搖雙ヘタリ

門矢倉

太平記云（頼貞四忠條）孫六内ヘ入テ六波羅ヨ
リ打手ノ向テ候ケル此間ノ御謀叛早顯
タリト覚候早面々太刀ノ目貫ノ堪エン
程ハ切合テ腹ヲ切レト呼テ腹巻取テ肩
ニナケカケ二十四差タル胡籙ト繁藤ノ
弓トヲ提テ門ノ上ナル櫓ヘ走上リ中差
取テ打番ヒ狭間ノ板ハ文字ニ排テ云々

信長記云（六条合戦條）正月二日三好カ一黨五
千餘騎ヒタヒタト寄来ル城中ノ勢始ハ
外搆ニテ相防シト暫シ支テ戦ケルカ寄
手猛勢ニテ込入ケル間叶難ヤ思ケン詰
ノ城ヘ引取門櫓ヨリ指詰引詰散々ニ射

ケレトモ寄手大勢ナレハ事トモセス
新撰信長記云明レハ九月一日備前守殿
百二三十騎召連城ヲ出玉ヘハ信長卿門
櫓ニ上ラセ御覧シテアレ成ハ浅井ニテ
ハ無カ年來ノ意趣ヲ忘レ今何ヲ面目ニ
出ラレケルソト大音聲ニ宣
隅矢倉
叡井日記云摂州青野合戦条先陣皆々木戸口
ニ付テ候ノツル陣々ハ段々ニ備ヘテ
入カヘ入カヘ攻ラレテ候此時ニ火矢ノ衆
多クアツメ大手搦手ヨリ雨ノフルコト
ク城中ニ射カケテ候城中モエレニメイ
ワクス大手ノ角ノ矢倉ヲハ焼ステニ候
播州佐用軍記云寄手惣勢城攻寄條西川原表ニ
ハ材木ヲ餘多寄番匠ヲ集メ勢楼ヲ組立
コト夥シ中略大手搦手門矢倉隅矢倉ノ近

クハ除キ二ケ所ノミ押立是ニ搦楯ヲ揖
矢間ヲ切テ蓋ヲ招番ニ是ヨリ城中ヘ鉄
炮ヲ打入ニ上ノ巧ミケル仕様

向櫓

太平記云野中八郎係寄手大勢也トイヘ共敵
手痛ク防ケレハ攻屈メ只歸逆木引向櫓
ヲ搦テ徒ニ矢軍計ニテソ日ヲ暮シケル
佐伯文書云弩因小三郎經貞申軍忠事年

歴應十二月三日奉屬于師泰ヲ押寄大
字坂城於西大手搦向矢倉連ロ攻軍忠之
事云ハ

走矢倉

應永記云身方自四方吾先ニ破リ入ラン
ト息ヲモ不次セ責ケレハ城中ノ四方ノ
走リ矢櫓ヨリ究竟ノ強弓勢兵刺詰弩詰
散々ニコソ射タリケレ

築城記云ハシリ矢クラブハ常ノ矢、蔵ノ如クシ
ちらへ塀ノ中ニ隙ノあけくサマヲ防まと
切てもし迫てゐる敵ニ也

出矢倉

太平記云 将軍御進発大渡山崎等合戦條 山崎ヘハ脇屋
右衛門佐ヲ大将トメ洞院ノ按察大納言
文観僧正大友千代松丸宇都宮美濃将監
秦藤海老名五郎左衛門尉長九郎左衛門

以下七千余騎ノ勢ヲ向ラル寶寺ヨリ川
端マテ屏ヲ塗リ堀ヲホリテ高櫓出櫓三
百余ケ所ニカキ雙タリ

着到矢倉

甲陽軍鑑云一过乃馬出ノ事一番到

矢倉の支

トカハノ矢藏

大友興廢記云 新城洞原 吉田良辰を為

んて城をあひまもりぬ法度しを因よ
のとまりくものすのかりまくなを
かさしのちまなりしちよ角るいて
とかもの矢蔵屋同横矢のかかるへき
屋うにみもうむ通いへて

端矢倉

大友興廢記云 深原城原同 城保 薩州勢白坂石見守
六百余の勢にて天正十四年十二月廿四日北
日深原原目の城に寄来る所中城中
原勢小にて敵に百餘人の勢にて石見守
り先勢に出むひの南自餘を合するさま
も敵多勢なきは打負て引たりそく石
見守もひきとりて人馬を休め寄る所南武
略の功有きは一まつ降参して後日にを
かるへき行ありと組の侍ともに志めし
あま勢石見守へ使者をたりて一通の書

を送る略 なる趣被聞召分於は同心之仲
迄事去速退城後場矢倉之番等被仰付候
者生涯世有為本意云し

小矢倉

築城記云小ヤクラハ七尺四方もかりて
ハ也

見せ櫓

甲陽軍鑑云信玄城ちん城見せ大将の事
見せやくらを以て侍大将の法也城見ハ
別なり一ハ山なりく城も亦若

畔矢倉

築城記云タシ矢倉カキヤクラト云ハうきて
あるく也 矢倉も城内の事

土矢倉

會津陣物語云西南ハ越後本庄出雲崎ノ
山ニ見へ渡ル則ち背炙ノ峠ニ土矢倉ヲ

立テ大筒野烽ヲ籠ル

井樓

應永記云大内此議ニ同シツヽ聽テ集材木以數百人之番匠盡種々之功勢樓四十八箭櫓一千七百東西南北合テ十六丈ノ魚鱗鶴翼ノ陣取ナレハ云々

太古物語云城中火をかけて脇をきらんと志すとてまつ自分腹をきるおもひをさとりて

の弦をもめ八尺あまりの毛のあまい甲

をつき南むきの勢揃小ゆるぎ大音あげて

中やり長八尺打ちの内小安積とかてかゝ

志けるくも普廣院ものゝはくひをたなわ

ぶたるものゝ云々

文正記云愛義廉御方有豪物突騎朝倉彈

正左衛門敎景云者為視諸軍勢勁高構井

樓一目直ニ下洛中邉土
東乱記云（結城方ノ條）清方持朝千葉出岐等カ
陣ノ前ニハ十余丈ノ櫓ヲ二三重ニ組
上タリ
信長記云（紀伊國退治條）丹和ヘ本陣ヲヨセラレ
ケレハ中野城ニ楯籠者トモ降参シテ
開渡ス間即信忠卿入替リ御座ス菅屋九
右衛門尉御使トメ瀧河永罡惟任惟住蜂
屋筒井彼等六人ヲ大将トメ鈴木孫一居
城ヲ攻ヘキ旨被仰下ケレハ各手分ノ三
月朔日卯刻ヨリ押寄竹タハヲ付樓樓ヲ
上隙透間モナク喚叫テ攻ケレハ甲ヲヌ
イテ降人ニソ成ニケル
安土日記云毛利吉川中國表ノ御敵不相
働請手ノ人數不入ニ付テ維住五郎左衛
門若州衆神吉東ノ口ヲ請取先一番ニ城

樓タカタカト組上大鐵炮ヲ以テ打入堀ヲ埋サセツキ山ヲ築山（西ノ字衍カ）被責候云々

見聞雜錄ニ信長公ハ武田勝川合戰ヲ節武田上杉川中島ニ度目ニ合戰ヲ皆津の城にて武田勢宮上山ヲ川端ヘ二ツニ分ケテ敵中ニ出勢ヲ一時ニ方ニ軍兵ニ仮伏焼ル煙伏謙信ニハ謀ヲ叶ヒ一代ニ軍ヲ見切伏ヲ一伏繕ニ二ツ者ニ成ル

以柴勝川合戰ニ井ニ胡倉談合ヒ敵の内に信長ヲ先ヘ陣ヲ仮焼く煙ハ兄弟信長ヲ一重ニ成ニ兄績ヲ南リ井ニ成ハ六々曉ハ本陣の井樽ニ上リ弱ハ目を放ヲ胡倉勢ヲ陣ニ立ル田部山ニ方ヲ吉法ニ居弱ニ

播州征伐記云野口長井四郎左衛門構城ニモ待儲自櫓上塀挾間射出鐵鐵炮如雨如電

雖然少不引退或石俵或竹手把築土堤上
井樓雜畔麥數万荷成堀之埋竹
播州佐用軍記云寄手惣勢麓攻寄條其後秀吉卿ヨリ
軍使來リ急キ敗軍ノ兵ヲ集メ陣ヲ張リ
番匠ヲ寄勢樓ヲ組立攻口ノ堀近押建是
ニ取登リ城中ヘ鉄炮ヲ打入コト盡夜不
怠
九ノオ
關八州古戰録云太田三樂父子再入小田城條以來天菴
方ヨリ働ヲ懸シタル時ハ眞壁大曽根ニ
告知シメ助援ヲ受ル相圖ノ爲トテ井樓
ヲ揚ケ遠候ヲ居ヘ敵間ノ近キニハ早鐘
ヲ撞キ遠キニハ狼煙ヲ拳ル約束ヲ定テ
三樂齊ハ片野土帰陣ナリ
別所長治記云三木城兵粮攻條向城ト敵城ノ間
僅ニ五六町ナリ堀ノ高サ一丈余二重ニ
付其間ニ石ヲ入搔楯柵篭ヲ高ク上前ニ

逆茂木ヲ引柵ヲ結川ノ面ニ大綱ヲ張乱
杭打大石ヲ入橋ノ上ニ番ヲ居改人ヲ通
ヲ[illegible]
藤葉栄衰記云此城平ナレハ二ケ所ニ井
樓ヲ上ケル如ク城中ヨリ是ヲ上サセシ
ト大工人足ヲ鉄炮ニテ打矢ヲ射掛ケレ
ハ夜ニ入暗紛レ大方接上城内ヨリ鉄
炮ヲ打方ヘ不見様ニ筵ヲ張ケレ者其後

ハ晝モ不危ニ階ニ臨ニ井樓ニ高樓上ケ
二ケ所ニ出來テ井樓ノ上ヨリ城内目下
迫蟻ノ這モ見ル如ク也
義殘後覚云宇留山ノ城江漢南押寄条漢南ハ宇留山
ヘ押寄三方ヨリ取囲ケル此城ノ東南ハ
向ヘ一町餘ノ大川アリ西乾ハ陸地也北
ハ廣高タル深山也去レハ東南ノ川向ニ
井樓ヲ透間モナク組上大筒ヲ打セテ天

地モ崩計ニ責タリケル大内人ハ
清正記云明朝歌を うちて中の音のうち
ふありと云日ひつ〳〵下知を待 露ふ情
正せいろうふあり見をあきたて考ろう
れ〳〵とおもせらる
水野勝成記云うの魚の坂川の根子云上仕
いろく孫うの姫ちのきりの坂ふ留りけ世
ぬろうをあけやい由中ハへ入れ〳〵神川

橋ハ上ゆうを付其仕寄分大内ようく陣ち
ち前この如ハ合ハ意ハ成ひ
大坂軍記云極月十二日大御所天満へ御巡見
羽軍ふも同御巡見有る玄蕃寄口井
橋へ羽軍ハ上ゆうハ知ふ御ゆる所を見城ゆう火
矢を射かけ大内方かけ事を外危ハよ身共
阪御近習諸ハへとも羽軍井橋ゆう深ハ下不
成ひ

築城記云セイロウヲアクルハ先スソハカリヨ
柱ヲふんだんせウヨウ立也一重ヒロまるハ
サマヲトリて切て面ノ方ヲ先トク上へきも也
一重の時ハ上へあけうさぬるやうニ柱のん
えをしてあくるあり又夜中ニなくるか
よ能也敵へ色くあくる時ハ畫ハ敵ニスカ
レ矢ヲ射あもにくきゆゑ西ハ矢をふせく
用意をしてあるふせぎ所ノそとをしらへ

やうにてをる

矢倉井樓

備前文明亂記云彼福岡ノ城ハ申ハ東西
ニ大川流廻ル川島少山アリ、、ヲ本城
ニシテ其面ニ堀ヲ掘屏ヲ塗年来調置中略
川瀬ニハ乱橛逆茂木ヲ引櫓井樓ヲ揚ク
レハ三方ハ大河也誠ニ異國ノ咸陽宮ノ
鐵築地ハ雁門関タレハ鳥通也是ハ雁門

不ノ木開ハ飛鳥モ難翔見ヘタリケル

十五
甲陽軍鑑云御大将足軽大将近
寄ハ敵ヲ見ふ所ハ事中ニ矢ハ無せいろう
ゑ数乃きけ事ロ傳ヲ

鐘撞堂

大園記云名護屋旅館作事條二ヶ所大手三階ニ鐘撞
堂五間ニ四間ニ羽柴五郎左衛門尉
武家名目抄稿第廿六冊

図書寮文庫

明治十五年五月廿九日旧稿校正　小野由久

同年六月一日　再校并書　竹本正名

同年同月四日以旧稿校正加朱點了　數原尚樹

同月七日再校了

明治十六年五月　校合　鈴木行一

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan